

大島みらい新聞 No.13

2014年3月27日発行

ごあいさつ ～No.13の発行にあたって～ 人と防災未来センター 高森順子



気仙沼市では、東日本大震災伝承検討会議が開かれ、市としての震災伝承に関する基本理念などが決定しつつあります。そのようななか、大島としての震災伝承のあり方について、これまでのみらいを考える会では、昨年12月のワークショップなどで議論を深めてまいりました。そしてこれらの議論を踏まえ、この度、自治会連絡協議会から市の検討会議に対して、大島の震災伝承のあり方についての提案書が出されました。大島の将来像を考える上で、その起点となる震災をどのように捉え、島外に表現するか、議論を重ねることはとても大切なことだと考えます。これからも島民の皆さまとともに震災伝承について考えていきたいと思っております。



うしろ まえ
背後地を考えて、未来に進む。

防潮堤の背後に広がる浜は島の財産です。
大島の未来像をアイデアにして、浜に描きましょう。

田中浜～小田の浜防潮堤背後地利用を考える

第13回大島のみらいを考える会は「田中浜～小田の浜の防潮堤背後地の土地利用を考える」をテーマに開催され、幅広い年齢層の参加者が活発な議論を交わしました。田中浜、小田の浜の防潮堤の高さに関しては原型復旧方針が確定しましたが、背後地の土地利用をどうするかという土地利用計画に関して行政は2015年度に入って調査・検討する予定とのこと。現段階では未確定ですが、その素案と住民との意見交換会は2015年8月～9月となる可能性があります。今から十分時間はありますが、その時までには住民側から背後地の活用法に関して意

見を出していくことにより、さらに利用価値の高い浜の背後地を考えるのみならず、大島を代表する2つの浜の顔をどのようなものにするか？は今後の島民の意見にかかっていると申します。

次項にはみらいの会の中で出てきた意見の一部が記載されています。今回のワークショップを通じて分かったことは、背後地だけを切り離して考えることは難しく海岸や浜をどうするかという議論と一体的に話し合うことが重要であるということ、そして田中浜や小田の浜の再生を大島全体の復興と合せて議論していくことなしに背後地を考えることはでき

ないということも参加者で共有しました。マリンスポーツから子供の環境教育の場まで多世代に支持される浜の背後地の利活用方法、避難路や道路計画と一体的に構想された安全・安心の背後地、そして日本中から観光客が訪れるような魅力的な田中浜と小田の浜の将来像をどう考えるのか、島民の想像力と活発な議論、そして行動力が今後ますます重要になると考えられます。これを機会に今後も引き続き日本に誇る大島の浜のみらいを皆で考えていきましょう。

(神戸大学 福岡孝則)

第13回大島のみらいを考える会 レポート

テーマ | 田中浜～小田の浜防潮堤 背後地の利用を考える

1 他の浜から学ぶ！



神戸大学
福岡 特命准教授

神戸大学・福岡孝則 特命准教授から、宮城県七ヶ浜の復興計画や、福島県石川町の防災緑地の苗木づくりなどを説明していただきました。また、海の家やマリンスポーツなど今後の浜の使い方も紹介されました。そして、以下のテーマを議題に挙げて、話し合いを行いました。

議題内容

- (1) どのような場所にしたいか？2つの浜の顔は？
- (2) 道路・避難路との関係はどうあるべきか？
- (3) 背後地の高さ設定をどうするか？
- (4) どうやって人が使いこなす浜をつくるか？
- (5) どんな緑を植えるか？(生態系)
- (6) どのようにスポーツや観光とつなげられるか？
- (7) 誰がどのように背後地を管理するか？(共有？教育？)
- (8) 島の他地域や気仙沼とのつながり？
- (9) 10年後、50年後、100年後の浜は？

田中浜 Tanaka-hama

冬も海水温浴施設など何か浜へ人を呼び寄せる仕掛けが必要。

いろいろな目的を持った人を受け入れる場をつくる。

防潮堤でスケートボードができるようにする。

バリアフリーな遊歩道をつくる。

トイレ、休憩所、スバ施設があるといい。

水上不二やゆず畑など、大島の歴史、文化、自然を歩きながら感じる事ができる「フィールドミュージアム」のような計画がいいのではないかな。

漁業を学ぶプログラムをつくる。

浜にテントを張って、漁師さんがその日に獲れた魚を振る舞う。

小田の浜 Koda-no-hama

小田の浜は国立公園に指定されてから勝手に何かを建てられなくなったが、昔の海の家が懐かしい。

今も33本生えている松を残したい。

ウェルカムターミナルができたなら、駐車場が必要。

夏の海水浴シーズンのためにシャワー、更衣室などが必要。

背後地はキャンプ場や海の家がいいのではないかな。

防潮林は松だけでなく、柚子や椿など大島にちなんだ木を植える。

若者世代向きのマリンスポーツなども積極的に取り入れる。

大島として Oshima

毎日、島民が散歩して楽しめるような浜にしたい。

小田の浜、田中浜全体を震災遺構と考え、再生の道のりを生きた遺構として観光資源とする。

自主的に砂浜を回復させるためにそれぞれの浜の地形に合った解決策を立ててほしい。

2 模型を囲んで考える！

小田の浜と田中浜の震災前の模型を見て、昔から浜が持ついいところを共有し、2つの浜の未来について考えました。



3 みんなで話し合う！

模型を見て出てきた意見を元に、浜ごとの特徴を活かした具体的な活用案を話し合い、発表しました。



大島における「震災伝承」提案

提案者

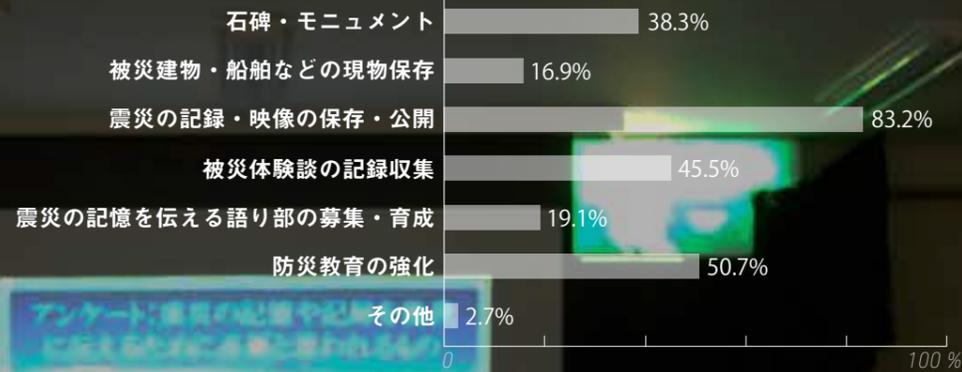
高森 順子
兵庫県・人と防
災未来センター
震災資料専門員

12月のみらい会でお聞きできた島民の方々の意見をもとに、大島としての「震災伝承」の方向性を素案にいたしました。これを踏まえて、市の検討会議に大島の皆さんから提案してはどうかと考えております。
※3月16日に行われたみらい会でのコメント

気仙沼市民の声

図：震災の記憶や記録を後世に伝えるために必要と思われるもの
(平成25年度気仙沼市アンケートより抜粋)

「震災の記録・映像の保存・公開」が約8割、「被災体験談の記録収集」が約5割と、震災当時を文章や映像で記録する必要があるとの回答が多くみられました。
また、「防災教育の強化」が5割と、教育面での要望も多くみられました。



「震災伝承の意義」 (アンケートを受けて)

- ・災害に強いまちづくり<将来世代への伝承> → 次の災害で人的被害を最小限に食い止めるために
- ・沿岸部に暮らす全国・全世界の人々への伝え → 今後大規模な津波襲来の可能性がある地域と共有
- ・追悼と鎮魂<犠牲を繰り返さない誓い> → 追悼と鎮魂は、残された者の復興の起点

大島として...

12月のみらい会が出た意見

- ・明治三陸津波で島が3分割されたことを伝える石碑
- ・みちびき地蔵 → 田中浜近くにあり、津波で流されたが再建
- ・水上不二と緑の真珠 → 地域の歴史と共に災害伝承
- ・小田の浜、田中浜の全体を震災遺構として捉える → 大島の自然を遺す
- ・ウェルカムターミナルに震災伝承館、水上不二記念館的なものを設置



再建された<みちびき地蔵> 島内に点在する石碑

気仙沼市へ提案された内容

- 1 大島の歴史と誇り(自然環境と豊かな資源)とともに、震災の経験を次世代に伝えるための展示
- 2 小田ノ浜・田中浜そのものを、観光資源であり、震災遺構として伝え残す
- 3 復興の起点(ex. 気仙沼市)である鎮魂の場を作り、震災伝承、ならびに大島の歴史を知る場とする
- 4 語り部や遺構、鎮魂の場を組み込み、震災伝承も踏まえた、大島観光ルートの創造



第1回三陸復興に向けたトークサロン開催

気仙沼大島みらいチームは、去る3月1日(土)、防潮堤を勉強する会および特定非営利活動法人気仙沼まちづくりセンターと共催で、気仙沼市民会館(中ホール)において「三陸復興に向けたトークサロンーいま何ができるか、次世代に何を引き継げるかー」を開催しました。復興に向けたインフラ事業が本格

化しつつあるなか、市民と行政で議論の噛み合わない場面もありますが、その過程で市民が学んできたことも多々あると考え、市内外で活動されてきた多様な立場の人から、復興への思いを再認識しながら、今後に向けての意見を発信・発題してもらいました。当日は約80名が参加され、長峯が進行役になり、市外からゲスト3名、そし

て市民7名の10名から、一人10~15分の持ち時間で発言をしていただき、大島からも上坂親子さんが発言されました。皆さん持ち時間が短い中、復興事業への意見やまちづくりへのアイデアを披露され、会を盛り上げていただきました。今後もこうした会を時々開催できればと考えております。
(長峯 純一)

連載コラム

大島人

OSHIMA-JIN

大島で生きる人のここだけのはなし

第4回

菊田 榮四郎さん
きくた・えいしろう
元大島小学校校長

一菊田先生は、大島小学校を定年退職されて、全国の大学の支援プロジェクトを受け入れているとお聞きしました。始めたきっかけは何ですか？

受け入れといっても、そんな気難しい支援ではないんです。支援したいと言ってくれる全国の

「離島と本土のコミュニケーションが、大島の子供達のおもてなしの心を育てるんです。」

大学生が大島に来て、子供たちと一緒に遊んだり、勉強したりしていますよ。大島には若い人が少ないですが、このふれあいを通して大学に行きたいって思う子供もいます。大島の子供たちが将来の希望を持ってくれるのは嬉しいことです。こういう島外とのつながりは子供たちの教育にも関わってきます。離島と本土のコミュニケーションが、大島の子供達のおもてなしの心を育てるんです。

一退職後の方が教育の範囲は広がっていますか？

そうですね。私は他に水上不二研究会会長もしています。最終的には水上不二の記念館を建てたいと思っています。小学校にも展示コーナーがあるし、資料はたくさんあるんですよ。大島を文化的な面から盛り上げることも必要だろうと思うんです。確かに防潮堤も生活のためにはもちろん大切です。しかし、生活には文化が伴わないと無機質なものになってしまいますね。わたしは島の教育で、大島を活性化させたいと

いう気持ちがあります。オーバーかもしれませんが、水上不二の詩やその文化は大島の子供たちの心の育成になるはずですよ。今年は水上不二の生誕110周年なので、色々なことをしたいと考えています。

一みらいを担う大島の子供たちのために大島ならではの教育をされているんですね。

大島の独特の雰囲気は、子供たちが成長するにはとてもいい環境だと思います。そして子供が考える大島の良いところは大人の視点では見ることができないことがたくさんあります。子供たちにはずっと希望や夢を持ってほしい。大人はそれを継続させてあげることが必要だと思います。子供たちがどんな大島にしていけるのか、楽しみです。

一菊田榮四郎先生が涙ぐみながら語る子供たちへの思いに、私ももらい泣きしてしまいました。今回は貴重なお話をありがとうございました。

取材：吉本、山本、磯谷

次回みらい会のおしらせ

5月のGW明けの開催を予定しております！

はじめての方も、奮ってご参加ください。

大島みらい新聞 No.13 2014年3月27日発行

企画・制作・発行 気仙沼大島みらいチーム
編集長 長峯純一(関西学院大学)
協力 大島地区自治会連絡協議会
写真 藤井達也
デザイン 山田恭平、山本十雄馬、磯谷二郎、関目峻行、吉本響
お問い合わせ 磯谷二郎
Mail:jiro.isogai0246@gmail.com